演劇創造

復　刊
第143号
（第55巻 第２号）
令和3年（2021年）3月15日発行

── 発行 全国高等学校演劇協議会 ──

〒732-0068 広島県広島市東区牛田新町1丁目1－1 広島市立広島商業高等学校　TEL 082-228-2481 FAX 082-222-0869
事務局長　黒　瀬　貴　之
ホームページ http://koenkyo.org/　　メール info@koenkyo.main.jp

愚直に ～コロナ禍の中で思うこと～

全国高等学校演劇協議会事務局長　黒　瀬　貴　之

10月下旬、21校が参加して広島地区大会を開催しました。学校の講堂を会場として借りたため、その条件としてできる限りのコロナ対策を講じました。例年５日間（リハーサル２日・上演３日）の日程を４日間（午前リハーサル・午後上演）とし、各校は上演する日のみ参加。上演が終わったら帰る。運営は教員のみ。客席には審査員と数人の役員教員だけ。上演中、時々客席から漏れる乾いたおじさんの笑い声。これはもう大会じゃなくてオーディションだなと感じました。本校は幸い県大会出場校に選ばれましたが、喜びつつもどこかモヤモヤした雰囲気。「なぜ自分たちが選ばれたのかわからない。」部員の一人はそう言いました。

足下がおぼつかないような気持ちで練習。練習中に演出から飛ぶ「もっと距離とって！」の声も当たり前になりました。

11月中旬、県大会。ここでようやく他校の上演を観ることができました。初めて観る他校の舞台。いつも以上の熱気がありました。それだけ「観る」ことに飢えていたのだと思います。しかし、大会に参加したのは出場校だけ。講評委員以外のほとんどの加盟校生徒は会場に入れず、舞台を観ることもできませんでした。ある顧問が「これでまた（県大会出場校との）格差が広がる…」とつぶやいていました。引率顧問付きを条件に希望する加盟校生徒に観せることはできなかったか。いやしかし、客席数や派遣可否のハードルがあって難しかっただろう…自問自答しました。

１月実施予定の広島市立高校総合文化祭が中止になりました。本校にとっては３年生の引退公演の舞台になるはずでした。さぞ残念がるだろうと思いながら告げると、部員たちは拍子抜けするぐらい淡々と受け止めました。動きのない表情を見ながら、もういろんなことを諦め慣れているのかもな、と思いました。

…これらすべては、今年、全国の各地で繰り広げられた光景だと思います。大会を実施して上演できただけマシと言えるかもしれません。大会さえ開けなかった地区・県もありました。校内の文化祭や自主公演がことごとく中止になったという話は、もう聞き飽きるぐらいです。

全国各地で審査員もしてくださっている工藤千夏さんが、劇作家協会の機関誌『ト書き』に載せる文章の中で次のように書いておられます。

「一度も舞台に立てなかった演劇部員は、いったいどんな高校演劇の思い出を胸に卒業するのだろうか？誰にも舞台を観てもらえなかった高校生は、卒業後も演劇を好きでいてくれるだろうか？」

胸が痛くなる言葉です。思えば我々はもう一年近く、この言葉に囚われ続けている気がします。この問いに、顧問としてどう答を導いてやれるのだろうか…。

悩みながら、無力感を覚えながら、それでも日々生徒と向き合っていくしかないのだろうなあと思います。

今日も部活に顔を出す。「先生来たよー」といつもの声。（あのね猫じゃないんだから。春から社会人でしょ君たち…というのは置いといて）あーだこーだと言いながら一緒に劇作りに励む。いつもの時間、いつもの姿に救われます。そして、実はここにあの重い問いの答がある、いや、ここにしか答はないんだろうなあと思います。いろんなものがなくなったけど、確かに存在したものがある。自分の居場所だったり、仲間

の存在だったり、新しい自分の発見という経験だったり。目に見えなくても自分の中で芯になって、自分をしっかりと立たせてくれる、そんなもの。

それを信じて、それに期待して、目の前の生徒たちと一緒に、また明日も頑張る。それだけは愚直に続けていきたいと思います。

「つながるということ」

大　石　由　紀

第44回全国高等学校総合文化祭・第66回全国高等学校演劇大会については、WEB上での交流・発表となり、令和２年７月31日から10月31日まで「WEB SOUBUN」として公開し、無事に終了いたしました。「2020こうち総文」としては、「紀の国わかやま総文2021」に襷を繋ぐことができたと、少しほっとしているところです。「普段みることができない演劇部門の活動の様子がわかってよかった」や、「高校演劇の上演を観ることができて楽しかった、感動した」など多くの声をいただきました。

「WEB SOUBUN」については準備期間２か月ほどしかない状況でしたが、様々なお立場の方が支えてくださり、参加校の努力と工夫をいただき、メッセージや写真、動画の公開をすることができ、また、部門記録集についても作成することができました。心から感謝いたします。「大会事務局が一番大変だから、頑張ってください！」などの励ましのメールや電話をたくさんいただきました。そのたびに、目頭がぐっと熱くなり、胸がほんわか温かくなり、奮い立つことができました。人と人とのつながり、これは何事にも変え難い、宝ものだと思いました。だからこそ、やはり一堂に会する開催は魅力的であり、得るものが大きく、参加した人の達成感も大きいのだと、痛感します。

たくさんの方のご協力により新しい試みに挑めた一方で、課題も多くありました。審査を行うことができなかったことや、生徒講評委員会の講評活動が冬にまで持ち越してしまったこと、動画における著作権の処理、生徒交流会や講習会などの交流活動ができなかったことなどがあげられます。部分的に協議を進めるのではなく、「できること」と「できないこと」を当初に協議し、全体の見通しを立てて進行すべきだったと反省しました。

まだまだコロナ禍にあり、いろいろなことの見通しが立たない状況で気の抜けない日々が続いておりますが、一日も早く通常の舞台での交流が再開できることを祈るばかりです。そして、和歌山大会では全国の高校生が演劇の情熱を燃やせる舞台となりますように、願っています。

土佐の高知より感謝を込めて。

（第44回全国高等学校総合文化祭（2020こうち総文）演劇部門委員会　部門代表委員）

こうち総文で見つけたもの

西　村　彩　那

史上初、WEB上で開催された「2020こうち総文」が幕を閉じました。上演校の皆さん、顧問の先生方、生徒実行委員会の皆さん、本当におつかれ様でした。

私は高校１年生の２月に生徒実行委員長に選出されました。不安でいっぱいで後ろ向きな考えばかりが浮かぶ私の心を変えてくれたのは、さが総文の視察でした。生徒実行委員会や生徒講評委員会の皆さんが声を掛け合いながら全力で大会運営に取り組んでいる姿を見て、このままではいけないと、これまでの自分を振り返ることができました。全国から演劇部の生徒や顧問の先生方、そして数千人のお客さまが集う全国大会を、私たちの手で創りあげていかなくてはならないと実感し、こうち総文演劇部門の生徒実行委員全員の力を集めて、大会を牽引していく決意が生まれました。

５月中旬WEBでの開催と決まり、全国の多くの仲間たちとお会いすることができないと知った時、とても辛く感じました。全国から高知においでになった皆さんを笑顔でお迎えすることを、私たちの大きな目標の一つにしていたからです。しかし、WEBに掲載された上演作品や学校紹介動画の中の皆さんは、とてもはつらつとしていて、私たちこうち総文生徒実行委員もとても勇気づけられました。きっと、演劇だけでなく芸術活動は、さまざまな時代の荒波に揉まれながら、試行錯誤を繰り返し、たくましく成長を続けていくものなのだと思います。

生徒実行委員会が発足してから、私はたくさんの仲間や先生方に助けられてきました。そして、いつも近くで見守ってくれる仲間の大切さをあらためて実感した大会になりました。生徒実行委員長として、そして志を同じくする仲間の一人として、こうち総文という大きな舞台に関わることができたことにとても感謝しています。そして、いつもあたたかな気持ちで高校演劇をお支えくださっている、すべての皆さまにお礼を申し上げます。

今までも、いつまでも、高校演劇が私たち高校生の「文化」として育まれていきますように。

令和３年の夏に行われる「紀ノ国わかやま総文」が、素晴らしい大会となることを心からお祈り申し上げます。

（生徒実行委員長　土佐女子高等学校）

こうち総文について

濱　田　涼　帆

私はこうち総文演劇部門の生徒実行委員・講評委員長として２年間、全国大会の視察に参加しました。全国大会は各ブロックを勝ち抜いた代表校が集まり、熱い思いのこもった上演がされるというだけあって、全国各地から大勢の方々がご来場されていました。この全国大会が次は高知県で開催され、私が講評委員会の一員として携わることができると考えると、とても嬉しかったことを覚えています。

高校１年時に視察した信州総文は今でも鮮明に思い出せるぐらいの衝撃が走りました。目の前の舞台で演じている人は、私と同じ「高校生」。負けたくない、私もこの舞台に立ちたい。漠然としていた思いが、いつしか「全国大会出場」という部活動をするうえでの具体的な目標となっていました。

翌年のさが総文で生徒講評委員会に参加した際は、１週間毎日が新しい学びと驚きに溢れていました。自分の大好きな演劇についてより深く考え、様々な視点から演劇を楽しみ熱中することができる本当に素敵な時間でした。そのなかで、来年度のこうち総文を必ず充実したものにし、この時間をたくさんの人に味わってもらえるような講評委員長になろうと心に決めました。

しかし、2020年に入ると新型コロナウイルス感染症が私たちの「当たり前」を奪うかのように猛威を振るいました。全国一斉の休校措置、緊急事態宣言。収まることのない猛威が、全国各地の方々に高知県に来ていただく機会を奪っていきました。

WEB SOUBUNとしての開催が決まり、生徒講評委員会の仲間たちと集まり語り合う活動は叶いませんでしたが、インターネット上での開催はマイナス面だけではなく、たくさんの方々に高校演劇の良さを知っていただける機会になったのではないかと思っています。また、講評委員の皆さんが各校の上演から考えたことや感じたことを、講評文として拝見できることを楽しみにしています。私は、こうち総文に携わることができて本当に良かったです。

最後になりましたが、来年の紀の国わかやま総文が無事に開催され、すばらしい講評活動となるよう心よりお祈りします。

（生徒講評委員長　高知県立高知南高等学校）

都道府県だより

静岡県

「無観客公演」

後藤　由美

今年度はとにかく新型コロナウイルスの感染症拡大問題に、高校演劇界もおおいに振り回され、次々とせまる困難な問題にあたらなければならない大変な１年でした。全国一斉休校のときには、通常の部活動や公演ができない時期がいつまで続くのかと心配と不安で過ごしました。各地区大会や県大会開催に向けて運営委員を中心にガイドラインの作成をはじめ準備を進めながらも、どのようなかたちで大会ができるか模索する日々が続きました。

そして、県大会をどのような形態で実施するかをいよいよ決めなければならなくなった時に、選択されたのは「無観客公演」でした。感染拡大を心配する声や学校がある以上、会場（ホール）で演技できるぎりぎりの形式として決定しました。客席には審査員と一部の関係顧問数名しかいない状態での大会がはたしてどんなものになるのか…。大会当日、予定時間通りに幕が上がり最初の学校の上演が始まりました。約60分の上演が終わって幕が下りた時、しばらくの沈黙が続き、客席から拍手がありました。寂しい拍手でした。客席に普通にお客様がいないということがどのようなことなのか、この一瞬で痛感しました。その後に続く上演も、おおむねこのようなかたちで大会は淡々と進行していきます。まさに、コンクールを成立させるためだけの上演、誰に向けてやっているのかよくわからないこの無観客での上演が残したものは、何とも言えないむなしさです。大会そのものは無事に終わったものの、果たして無観客という形式はやむを得ない選択肢として正解だったのか考え込んでしまいました。

コロナ禍に対応しながらの演劇活動は、かたちを変えいろいろな団体で今も続けられています。感染をいかに防止するかについて対策をよく考え、時にリモートや映像を駆使しての演劇やパフォーマンスには本当に頭の下がる思いです。ただ、コロナ禍を防止することにばかり気をつかった上演スタイルが、高校演劇にふさわしいのだろうかとも考えます。ただでさえ、忙しい中を時間をやり繰りしながら部活動を続け、やっとの思いで会場での公演にこぎつけ、大勢のお客様に観てもらえて、それでも多くの学校にしてみるとその会場で行う公演はそのただ一度きりです。同じ場所にいるお客様と時間も空間も上演で生み出されるエネルギーも思いも全て共有しやりとりする演劇。高校生にしてみれば、上演中のその時に生で味わえるお客様との交感やり取りは本当に貴重な大切な時間であると感じます。

言うまでもなく、演劇はやる側だけでなく、それを見に来る人たちとの協働による創造活動です。高校生にとっては、それがコンクールであれ校内での自主公演であれ多くの人に見てもらうことで、お客様と一緒に自分たちのパフォーマンスを完成させていくことを肌で実感してこそ、達成感や充実感を味わえます。協議会や県の文化連盟の会長先生たちは無観客で実施ということにだいぶ安心されました。保護者の皆さんも無観客という点で感染防止のための努力姿勢を受けいれてくださり、参加同意書に印を押して生徒を送り出してくれました。それでも、これでよかったのか自問自答の毎日です。

実際に無観客公演をやってみて今はっきり言えることは、できるならば、この形態は極力避けるべきだということです。演劇部生徒のみなさんは張り切って、そんな悪条件などものともせずに堂々と上演をしていました。でも、きっと観客が客席に大勢いて、笑ったり、見入ってくれたり、拍手してくれたりしたら、どの学校も何倍もの素晴らしい上演をしてくれたに違いないです。さんざん考え検討したうえでの結論で選んだ無観客公演の大会に協力してくれた多くのみなさんに感謝し、一生懸命ベストを尽くしてくれた演劇部のみなさんに敬意を表し、筆をおきます。感染拡大の早急の収束を願って。

（静岡県高等学校演劇協議会事務局長）

熊本県

「あたらしい“大会様式”はあっても…」

髙原　良明

原稿依頼をいただいた９月末、わたしたち熊本県はちょうど「一般非公開・演劇部生徒と顧問のみ」の大会開催を決めて、さらにその先にある九州大会の運営に突き進んでいたところでした。「10月末の締切…ならば10月の地区大会を終えてから一気に…」との考えが甘く、その後はまさしく「新しい“大会様式”」づくりにただただ追われてしまいました。言うまでもなく、日本じゅうすべての都道府県で頭を痛めた、感染症拡大防止対策です。まずもって、12月の九州大会を、参加各校・各県専門委員長の先生方の多大なご助言・ご協力により無事に開催できたこと、熊本県として深く感謝申し上げます。

さて、熊本県では、高校演劇の生徒・顧問の先輩方が県高校演劇連盟の時代から築き上げてこられた、生徒と教員がともに運営にあたる伝統があります。具体的には、①県の組織のうえで部会長（校長先生）に次ぐ常任委員長を生徒代表者が担当する（顧問側の専門委員長の私は厳密にいえばその下です）、②生徒複数名の常任委員と顧問複数名の常任委員が年４回の会議で議論する、③最高議決機関である総会、それに次ぐ代表者会には、各校の教員と生徒代表者が集まり、ともに同等の議決権を持つ、④大会等では、進行・道

具・照明・音響・会場・速報・記録・弁当等の部署制度をとり、生徒たちは互選でチーフ・サブチーフ生徒を選出しながら、学校の枠を超えた大会運営、技術伝承を行う、などです。熊本県は、会議、各種事業、大会において生徒の活躍によって成立させることが当たり前でした。

ところが、今年度はこのご時世にストップがかかります。例年であれば５月末頃に開催される県高校総合文化祭（熊本県では全国総文の壮行発表会的な意味合いであり、演劇専門部のコンクールにあたりません）における３地区ごとの合同上演も、「集まるな」から「開催中止」になります。全国からご心配いただいた平成28年熊本地震でさえ「開催中止」にはなりましたが、「集まる」ことはでき、生徒たちは細々ながらも合同練習や部署説明のための会議を持ちました。しかし、今年度は「集まるな」です。休校が明けた６月になっても生徒たちを集めることができません。その間、規約上でほぼ死文化していた「顧問会」を数十年ぶりに開催、顧問だけが集まって活動計画を審議する“違和感しかない”会議を開き、総会も書面開催…まだ生徒を集められないまま各種の生徒育成事業が中止になっていきます。いわゆる第一波がややおさまった（とされる）隙をついて、熊本市地区合同練習会・部署説明会を開催したのが７月25日でした。やっと出会えた生徒たちの交流に、顧問一同ほほえましく思っていたところに、８月以降の第二波でまた…。

生徒・顧問だけの大会で、生徒たちは保護者にお芝居を見せることが叶いませんでした。消毒液は密なのに客席はディスタンス、幕間の換気も相まって心身ともに寒さを感じるホール、例年のように学校関係なく昼食を楽しみたい生徒たちに「密です！」と言わざるを得ない顧問、育成事業未経験の１年生に「先輩たちからのバトンをどうやって…」と頭を抱える各部署のチーフ生徒ら２年生たち、学校の判断で「すみません…」と運営参加できないことを謝ってこられる顧問。今までの熊本の“大会様式”ではありませんでした。全国の皆様と同様、どこかで折り合いをつけて「新しい“大会様式”」を模索して形にした一年でした。

しかし、熊本県として譲りたくないものがあります。12月の九州大会、「熊本県での開催には生徒が必須」とのわたしたちわがままに、各県から最後までご心配とご配慮、そしてゴーサインをいただき「集まれた」最低限の人数の生徒実行委員。今年奪われたものへの“飢え”が彼らを突き動かすすさまじい４日間でした。幸い、各県からの参加者の皆様からは、その姿と仕事ぶりにご好評をいただけた、と思っています。心底思います。「今年、九州大会があってよかった」と。熊本の“運営様式”の核は守り続けたいと思っています。

（熊本県高等学校文化連盟演劇専門部専門委員長）

世界的な規模で猛威をふるい続けている新型コロナウイルスは、高校演劇にも多くの影響を及ぼしました。本誌を読まれている演劇部のみなさんや顧問のみなさんにおかれましては、計画を何度も修正しながら、新たな形の上演を模索する１年間だったと思います。

余談が許されない状況がまだ続いていますが、一日も早くこの状況が収束することを祈念しております。

そのような社会的にも厳しい状況の中、特別協賛団体である東京工科大学 日本工学院専門学校をはじめ、多摩美術大学、四国学院大学、桐朋学園芸術短期大学をはじめ多くの学校や民間企業から支援をいただくことができました。このような支援をもとに、新たな形ではありますが、高校演劇の活動を続けることができました。心から感謝を申し上げます。

「春フェス開催県から ～お城と桜と劇場と～」

小原　雅之

2020年、世間ではオリンピックが延期になったことが大きな話題となりましたが、私にとっては春フェスや夏の総文がWEBでの上演になったことの方がとてつもなく大きなインパクトがありました。大会の運営をしっかりと目に焼き付けて自分たちの運営につなげること、全国の理事会等で大々的に宣伝して「2021年の春、福岡でお待ちしています」と伝えること、そして全国の舞台をリアルタイムに客席から観ること、これらができなくなったことはとてもショックで悲しいことでした。ここで上演する予定だった上演校や運営に携わる方々の悔しさや無念さはどれほどだったかと、想像するだけで本当につらい気持ちになります。

そのような中で、いよいよ春フェスがやってきます。2021年３月26日（金）～28日（日）、北九州芸術劇場（中劇場）にて開催されます。どこから手をつけるべきなのか、今は何をすべきなのか、正直に申し上げますとよくわかっていません。特に現在もまだ終息の見込みがまったく立たない新型コロナウイルスの状況次第で、入場できる人数が変化するかもしれませんし、大会自体を開催できなくなることもあるかもしれません。目の前にぼんやりとした「不安」という霧が立ちこめているといったところでしょうか。きっと開催できることを信じて、私たち福岡県は準備を進めていこうと思います。

あまりネガティブなことばかり書くのも精神衛生上よろしくありませんので、福岡県、特に会場となる北九州市の紹介をしていきたいと思います。かつて100万都市と呼ばれ、一方で四大工業地帯の一つに数えられた北九州市ですが、戦後間もない頃から社会人による演劇が盛んでした。日本で最も古いアマチュア劇団といわれている「青春座」をはじめ、多くの劇団が様々な場所で公演をしていました。そこから1993年に「北九州演劇祭」がスタート、その熱気を受けて2003年に「北九州芸術劇場」が紫川沿いにある「リバーウォーク北九州」に開館しました。近代的かつ独特のフォルムであるリバーウォークの中にある芸術劇場は、見る者の目を楽しませてくれます。中劇場のホワイエからは北九州市のシンボルでもある小倉城がくっきりと見え、春はお城と桜が綺麗に見える絶景スポットとなっています。観劇の合間にホワイエの窓から見える非現実的な世界をご堪能ください。また、周辺には美味しい山の幸、海の幸が安価で食べられます。特に劇場の近くにある「旦過市場」は見て回るだけでも楽しめると思います。上演校の素晴らしい舞台を観た後は、余韻に浸りながら美味しいご飯でもいかがですか。

上演校が悔いの残らない上演となるよう、教員、生徒一丸となって準備をいたします。そして、数年後の思い出の１ページとなるよう、しっかりと運営をしていきたいと思います。2021年春、北九州芸術劇場でお待ちしています！

（福岡県高等学校芸術・文化連盟演劇専門部会　専門委員長）

2019年度　全国高等学校演劇協議会決算報告

＜一般会計＞

収入の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
基本収入	会費	2,100,000	2,054,000	1,000円×2054校分
その他の収入	活動報告広告	800,000	665,000	「活動報告集」広告掲載料
	寄付金	100,000	100,000	「演劇創造」広告掲載料等
	高文連より	232,660	232,660	高文連より活動補助・旅費
	利息	40	25	三井住友銀行
繰越金	前年度より	3,165,511	3,165,511	繰越金
民間支援	特別協賛金	3,000,000	3,000,000	東京工科大学 日本工学院
	協賛金	1,324,000	1,324,000	NHK・四国学院・桐朋芸術・金井大道具
合　計		10,722,211	10,541,196	

支出の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
管理費	旅費・交通費	2,300,000	1,842,580	佐賀　新潟　高知 事務局会議旅費等
	役員派遣費	350,000	321,929	役員派遣
	会議費	80,000	70,000	臨時常任理事会開催費
	通信費	200,000	150,690	切手、送料、ファクス等
	印刷費	50,000	80,568	賞状、封筒等
	消耗品費	50,000	21,134	文具、コピー等
	事務局維持費	70,000	72,138	事務局長行動費、会議室代等
	記録費	20,000	20,000	脚本購入等
	雑費	30,000	12,962	謝礼等
事業費	会誌発行	1,300,000	1,423,090	演劇創造140・141号、発送費
	ブロック連絡費	10,000	11,220	各ブロックへの振込費用等
	活動報告集	950,000	961,200	各都道府県活動報告集
渉外費		50,000	25,170	全国大会関係・弔慰金
大会運営費	ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金（各ブロック25万円）
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援（佐賀県、チラシ5万円含）
	舞台技術講習会	300,000	273,532	舞台技術講習会補助
	春季研究大会	300,000	300,000	特別会計へ
予備費		2,162,211	0	
合　計		10,722,211	8,086,213	

＜特別会計＞

収入の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	全国高文連活動補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
	協賛金	400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		645,263	645,263	前年度繰越金
合　計		1,945,263	1,945,263	

支出の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
大会運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助(30,000×10校)
	運営費	1,000,000	655,830	消耗品・委託費・印刷費・旅費等
	予備費	645,263	0	
合　計		1,945,263	955,830	

2020年度　全国高等学校演劇協議会予算

＜一般会計＞

収入の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
基本収入	会費	2,054,000	2,050,000	1000円×2050校
その他の収入	活動報告広告	665,000	700,000	「活動報告集」広告費
	寄付金	100,000	100,000	「演劇創造」広告費
	高文連より	232,660	150,000	役員旅費・運営費
	利息	25	25	ゆうちょ銀行
繰越金	前年度より	3,165,511	2,454,983	前年度繰越金
民間支援	協賛金	3,000,000	3,000,000	日本工学院
		1,324,000	924,000	四国学院・桐朋学園・ＮＨＫ
合　計		10,541,196	9,379,008	

支出の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
管理費	旅費・交通費	1,842,580	1,500,000	高知・福岡・和歌山 事務局会議旅費等
	役員派遣費	321,929	250,000	役員派遣
	会議費	70,000	80,000	臨時常任理事会開催費
	通信費	150,690	150,000	切手、送料、ファクス等
	印刷費	80,568	100,000	賞状、封筒等
	消耗品費	21,134	50,000	文具、コピー等
	事務局維持費	72,138	70,000	事務局長行動費、会議室代等
	記録費	20,000	20,000	脚本購入等
	雑費	12,962	30,000	謝礼等
事業費	会誌発行	1,423,090	1,400,000	演劇創造142・143号、発送費
	ブロック連絡費	11,220	10,000	各ブロックへの振込費用等
	活動報告発行	961,200	950,000	各都道府県活動報告集
渉外費	渉外費	25,170	50,000	全国大会関係・弔慰金
大会運営費	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金（各ブロック25万円）
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援（高知県、チラシ5万円含）
	舞台技術講習会	273,532	50,000	舞台技術講習会補助
	春季全国大会	300,000	300,000	特別会計へ
予備費		2,454,983	1,869,008	
合　計		10,541,196	9,379,008	

＜特別会計＞

収入の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	春季全国大会運営補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		645,263	989,433	前年度繰越金
合　計		1,945,263	2,289,433	

支出の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助
	運営費	655,830	1,300,000	消耗品・委託費・印刷費等
	予備費	989,433	689,433	
合　計		1,945,263	2,289,433	

上演許可は忘れずに

上演予定の作品が、既成作品を上演する場合は、練習を始める前に上演許可を取りましょう。まちがえても大会の直前になって、「明日までに許可がないと困る」、「とにかく急いで送って欲しい」などの交渉は絶対に避けて下さい。

時間のゆとりを持ち、誠意を持って上演許可を出してもらう交渉をすることを心がけて下さい。

詳しくは、全国高等学校演劇協議会のホームページ内にある、「規約・上演許可」のページをご覧ください。

（様式見本－1）

上演許可願

年　月　日

様

県　　高等学校演劇部
（顧問　　印）

この度、下記の要領で、貴作品を上演したいと思いますので、ご了承くださいますようお願いいたします。

記

1.上演作品　　（　　社版）
2.上演期日　　年　　月　　日（　曜日）
3.上演回数　　1回
4.会場
5.入場料　　無料
6.連絡先

7.記事　　この上演は、　　県高等学校演劇連盟発表会参加のものです。

（様式見本－2）

上演許可書

高等学校演劇部殿

見　本

下記の要領で、上演を許可します。

・作品名
・作者名
・上演日　　令和　年　月　日（　曜日）
・上演場所
・上演目的
・上演団体
・上演責任者
・上記連絡先　住所　〒
　ＴＥＬ

令和　　年　月　日
作者署名